

目次

卷頭言……………一

古本説話集の語彙について——主として語性の観点から……………山内洋一郎……………五

色葉字類抄に於ける別名の性格……………原卓志……………二四

——古往来に於ける使用量と使用場面との分析を通して——

東寺観智院本三宝絵詞に於ける「キ」と「ケリ」……………井上親雄……………四

『草案集』における「方」字について……………田中雅和……………五

平安鎌倉時代に於ける「ナヲバ——トイフ」と「——トナツク」について……………鈴木恵……………六

文選の訓読における注釈書の利用について……………松本光隆……………二七

蓮成院本類聚名義抄の成立について……………山本秀人……………三四

——異質な本文を有する部分の存在とその素姓——

鎌倉時代遊仙窟有注本殘卷影印・翻刻に並解説……………山崎誠……………三六

影印・翻刻……………二六

解 説……………二〇一

宗性上人編著『春華秋月抄草』第十二紙背に見える食物名彙……………石井行雄……………三六

をめぐって……………三六

順徳院御集総索引稿・順徳院百首総索引稿	……	三三
新潟大学教育学部鎌倉時代語研究会	……	三三
順徳院御集総索引稿	……	三七
順徳院百首総索引稿	……	三二
観智院本「三寶繪詞上」漢字索引	……	三九
広島大学国語史研究会	……	三九
会員近著紹介	……	四五
鎌倉時代語研究会記録	……	四四
「鎌倉時代語研究」(第一輯・第七輯) 目次	……	四五
後記	……	四六

古本説話集の語彙について

——主として語性の観点から——

山内洋一郎

- 目次
- 一、はじめに
 - 二、和文脈と漢文訓読文脈
 - 三、「頼りなし」と「貧シ」
 - 四、和語と漢語

一、はじめに

梅沢本『古本説話集』は、延べ語数約一三、〇〇〇の小冊子であるが、語彙史資料として見るときも、相応の価値を有している。所収語彙の延べ語数・異なり語数、品詞別語数と比率など、計量的側面については、『古本説話集総索引』(風間書房、昭和44)の付篇で六種の表を掲載し、基礎語彙的側面については、「物語体説話文学の語彙」『日本の説話』7、東京美術、昭和49)で、表示と分析を行った。そこで、本稿では、いかなる語性の語彙によって本資料が構成されているか、語彙史の資料として語種位相の面から見ていかなる特色があるか、こういう観点を中心として考察してみようと思う。

説話集は一般に編者が不明であり、編者自身のあり方による個性的語彙相は論じがたい。多かれ少かれ、編者の言語文体が統一体とするのに働きかけているはずであるが、この観点による把握は困難である。説話自体については、書承か口承かが重要な点であるが、説話集全体としてこのどちらか一方であるよりも、所収各説話が事情を異にしていることが多く、そ

色葉字類抄に於ける別名の性格

——古往来に於ける使用量と使用場面との分析を通して——

原 卓 志

目 次

- 一、はじめに
- 二、古往来に於ける別名
- 三、古往来に於ける別名の使用量の変化とその背景
- 四、古往来の内容と別名の使用場面
- 五、おわりに

一、はじめに

三卷本色葉字類抄疊字部には左に掲げるような「——名」と注記された語が登載されている。この「——名」注記された語は大よそ「——名」の「——」に当る見出語の下に小書の形で掲出されている。あわせて掲げる。

- 梁山象山リヤウサン (上75ウ6、梁・山に平声点あり)
- 草聖サウセイ (下53オ4、草に上声点、聖に去声点あり)
- 象サウ平声俗象鳥同梁山 (下動物44オ3、「梁山」右傍に「リヤウサン」、象に平声・去声点、梁・山に平声点あり)
- 池チ草聖イケ千秋張芝 (以下略) (上地儀2ウ3)

これらが色葉字類抄の古態を残すと言われる二卷本世俗字類抄、節用文字、そして二卷本色葉字類抄のいずれにも登載さ

れていないということから、恐らく二卷本色葉字類抄の如き形の段階から三卷本色葉字類抄の如き形へと改編されてゆく過程での増補にかかるものであろうということは既に先学の指摘せられたところである。¹⁾

この「——名」注記された語が「——」に当る見出語の下で小書される場合、その語に対しては原則として声点や仮名音注以外には注記が施されないのであるが、次の三例に限って注記がなされている(用例を掲げるに当って以下論旨に関係しない注記を一切省略する)。

- 星ホシ貫珠分位司夜已上星名也 (上41ウ1)
- 鐘カネ長樂丸乳已上鐘別也 (上99オ4)
- 德チ綱山周白陶朱已上德別名也 (上56ウ1)

これらの例のうち特に第二例「已上鐘別也」第三例「德別名也」とによって色葉字類抄疊字部に登載された「——名」注記された語が色葉字類抄の編者に「別名」と呼ばれていた可能性があることは別稿に述べた。²⁾ 本稿でも「——名」注記された語を仮りに別名と呼び、「——」に当るものを項目と呼ぶことにする。

ところで、この別名は唐土の文献にその典拠を多く求め得るものであり、それらは唐土所撰の類書である初学記に謂う所の事対と深い関係を有するものであるということも別に述べた。³⁾

さて、このように唐土の文献にその典拠を有し、更に初学記に謂う事対と深い関係にあると言わば特殊な語である別名が、何故に二卷本色葉字類抄の形から三卷本色葉字類抄の形へと改編されてゆく過程で殊更に増補されたのであろうか。増補されている事実から言えば、これら別名に対して色葉字類抄の編者が何らかの価値を認めていたに相違あるまい。この問題を説明する為の一方法として、本邦人の手になる当時の文献に於いて、これら別名がどのくらいの量で、どのような場面・文脈で、どのような意味で用いられているのかということに就いて検討することが考えられる。しかし、一口に本邦人の手になる文献と言っても、当時の文献は様々なジャンルにわたり、貴族・僧侶等、作者の階層も広くなっており、総てを